

【論文】

現代青年の対人関係のあり方が推しとの関係性に及ぼす影響 — 「恋愛的推し」に着目して—

高野 紋佳 (岩手大学大学院総合科学研究科)

奥野 雅子 (岩手大学人文社会科学部)

I. はじめに

友人関係などの変化によって、趣味との付き合い方や趣味自体が変わったことはないだろうか。現代の青年にとって趣味と対人関係のバランスをとることは重要な問題であると考えられる。近年では、SNSを中心に「推し」という概念も話題になっている。「推し」に対して向けられる感情は様々であり、あくまで趣味として捉えている場合もあれば、恋愛的な好意を向けている場合もある。「推し」への過度の熱中は、日常の他者との関係性に様々な問題を引き起こすことが予想される。さらに「推し」と自身の関係性の捉え方も個人差が大きいといえる。このように推しに対する感情や推しとの関係性が多様である要因として、日常の対人関係から影響を受けていることが考えられるが、「推し」への態度と対人関係の間の関連については明らかにされていない。

そこで、本研究では、推しがいる人、特に恋愛感情を向けている推しがいる人において、対人関係のあり方や捉え方が推しに対する感情や推しとの関係性に及ぼす影響について検討する。

II. 問題と目的

1. 「恋愛的推し」という概念について

NHKの朝の情報番組「あさイチ」では、「推し」について、もともとはアイドルの「イチオシのメンバー」を指す言葉であり、そのイチオシという言葉をもとに略した形で「推し」という言葉が生まれたと紹介されている。近年では情熱を捧げて応援する対象を意味しており (NHK, 2020)、現在 SNS 上では崇拜の対象に近い意味で用いられることが多い。しかし、推しがいる人の推しへの感情は様々であり、一括りに定義づけることは非常に困難である。さらに、推しとなる対象も多様化しており、もともとの対象であったアイドルのみならず、俳優、声優、モデル、作家や漫画家、さらに漫画・アニメ・ゲームなどの2次元のキャラクター等もその対象に含まれる。また、現実存在し、日常的にコミュニケーションをする相手も推しである人も少なくない。このように実際のリアルな人間関係に推しが存在する場合、自身と推しが日常的に深く関わる機会が発生することもある。この点はアイドルや俳優、漫画やアニメ等のキャラクターが対象のときとは大きく異なるといえる。しかし、推しの対象がどのような属性であっても、推しを応援する活動、いわゆる「推し活」は様々な手段で行われている。グッズ購入やイベント参加等で金銭的な応援をすることもあれば、周囲の人へその魅

力を共有してファンを増やしたり、自身の推しを扱って創作活動を行ったりなど、方法は多岐にわたり、その熱量にも個人差が大きい。

一方、高野（2020）において、推しが現実存在し日常的にコミュニケーションをする相手である場合、恋愛感情を抱いている場合もあることが示された。よって、本研究では、『推し』と認識しつつも、恋愛感情を抱いている対象のことを「恋愛的推し」と定義する。また、実際は推しの対象が現実の身近な人間関係に存在していない、アイドルや俳優、漫画やアニメ等のキャラクターの場合でも「恋愛的推し」となることがある。このように、恋愛感情を抱く推しの対象は多岐にわたる。

2. 青年期の対人関係における特徴

榎本（2000）は、中学生、高校生、大学生を対象とした横断的研究で、男女ともに学校段階が上がるほど「相互尊重欲求」が高まることを示した。「相互尊重欲求」とは、互いの個性を尊重することを望む欲求であり、そのためには自分の意思と確立した感情を持つ必要がある。これは青年期での最終的な欲求であり、特に同性の友人との関係において現れるものとされている。

また、山田・岡本（2008）では、アイデンティティは個人の中でのみ形成されるのではなく、他者との関係性の中でも形成・確立されていくとされ、青年期のアイデンティティを「個」と「関係性」の2つの側面から捉える新たなアイデンティティ尺度を作成している。そこでは、青年期における「個」としてのアイデンティティは、自己の能力に対する肯定的な意識や将来に向けた取り組みなどで構成されており、「関係性」に基づくアイデンティティは、他者などへの信頼感や他者との適切な距離感、関係の中の自分の役割や立ち位置などで構成されていることが明らかにされている。さらに、「個」と「関係性」のアイデンティティのバランスによって、対人関係のあり方に相違があると捉えられ、青年自身の認識についてインタビュー調査が行われている。その結果、「関係性」に基づくアイデンティティが平均より高いと、自己と他者を相互に独立した存在として認識していることが示唆された。また、他者との関係性への満足や安心感だけでなく、不満についても語られており、個人としての意見をも持つことができていることが示されている。このように「関係性」だけではなく、「個」としてのアイデンティティも高いことは、精神的健康の高さとも関連があると結論づけられている（山田・岡本, 2008）。

一方、石本（2010）は、青年期の「居場所感」が心理的適応などに与える影響について検討している。そこでは、個人が「ありのままにいられる」と「役に立っていると思える」ことが居場所の心理的条件であると定義され、友人や家族の前で「ありのままにいられる」と思えることが、自己受容に良い影響を与えていることが示されている。

このように、青年期の良好な対人関係は、精神的健康やアイデンティティの確立などの発達の観点から重要な役割を果たしていると同様な研究から示されてきたといえる。

3. 青年期における対人関係と趣味の関連

「推し活」は現代青年にとって重要な趣味の一つであり、対人関係とも関連が指摘されている。榎本（1999）は、青年期の友人関係の発達のな変化について検討を行った。青年は交友活動について、友人との行動や趣味の類似点に重点をおき、仲の良さを確認するような付き合い方である「親密確認行動」を行っていることが示唆された。また、大学生においては「信頼・安定」と「不安・懸念」との関連が示された。これらのことから、行動や趣味の類似性で友人関係を構築し継続し友人を信頼しているにもかかわらず、自身の趣味などについて「どう思われているのだろう」という不安も背景にあると結論づけられている（榎本, 1999）。また、岡田（2021）は、趣味などに過度に熱中し、生活のリソースを多く注ぎ込む人々のことを「オタク」と定義しており、趣味への熱中度が高い「オタク」ほど、友人と距離をとった関わりをする傾向があると述べている。

山口（2015）は、オタク趣味をもつ大学生は、趣味活動より大学生活、つまり勉強の方が基本的に優先度は高いが、一方で趣味活動も両立するために工夫していることを明らかにした。そのひとつとして、趣味の話題は大学外の関係性、特にインターネットを介した関係の中で行うことで補完していることが報告されている。こうした工夫によって、大学内の友人関係、特に非オタクの友人とも問題なく付き合うことを可能にしていることが述べられている（山口, 2015）。

このように青年期においては趣味と友人関係のバランスを取ることが重要な課題となっていると考えられる。しかし、こうしたオタク趣味と対人関係の関連について研究したものは少なく、十分な検討は未だなされていないといえる。

4. 青年期の恋愛関係における問題

「恋愛的推し」について検討するためには、青年期の恋愛関係の特徴や問題について整理することが必要である。石本（2010）は、恋人の前でありのままにいられると感ずることが、大学生女子において充実感に影響していることを報告している。加えて、恋人の役に立っていると思えることは、大学生男子では自己実現的態度と充実感、女子においては自己受容に影響を与えることが明らかにされている。このことから、青年期には恋人との関係性の捉え方が心理的適応に影響することが示されている。

しかし、青年期の恋愛関係における問題も指摘されている。伊福・徳田（2006）は、青年の恋愛依存傾向について男女間で比較を行った結果、男性はパートナーを心の支えとし、自己犠牲的になる側面があることを報告している。一方、女性は異性に対して無条件の受容や自分への注目を求める傾向が高いことが示される結果となっている。このような傾向が強いと、パートナーが浮気を繰り返したり暴力的であっても、「誰もいないよりはいい」と考えるなど、相手に依存し離れられない場合があることが指摘されている（伊福・徳田, 2006）。加えて、パートナーに対して過剰に依存し執着している人は、恋人以外の周囲との関係がやや希薄化している可能性があることも報告されている（田中, 2009）。

このように、青年期後期の恋愛関係は新しい家族の形成など将来像に影響を与えるものであると考えられ重要である一方で、恋人への過剰な依存から他の対人関係を疎かにしてしまうという問題も明らかになっている。

5. 本研究の目的

これまでの研究より、青年期に良好な対人関係を構築することは適応感や発達の観点からも非常に重要であることが示されてきた。しかし現代青年、中でもいわゆるオタク趣味を持つ者にとって、趣味と友人関係のバランス調整が課題となっていることも指摘されてきた。さらに、青年期においては恋愛関係の重要性が意識されている一方で、相手に過度に依存するなどの問題も生起している。さらに、近年、好意的な感情を向けている対象を「推し」として捉える考え方が、SNS を中心に広まっている。しかし、「推し」という概念が注目を集めているにもかかわらず、臨床心理学領域での研究はほとんどなされていない。また、現代青年の趣味という視点からの研究も少なく、趣味が対人関係に及ぼす影響についてのみ考察したものがほとんどである。「恋愛的推し」がいる人は、趣味の範疇を超えた「好きな人」として推しを捉えているといえるが、これは日常の対人関係、特に恋愛関係に対する考え方や構築方法に影響を受けているのではないかと予想される。

そこで本研究では、推しがいる人、その中でも特に恋愛的推しがいる人の対人関係、特に恋愛関係と友人関係のあり方や捉え方が、推しに対する感情や推しとの関係性に及ぼす影響について検討することを目的とする。

Ⅲ. 方法

1. 調査対象者

大学生、専門学生、および大学院生 233 名（男性 50 名、女性 178 名、無回答 5 名、平均年齢 20.71 歳、SD=1.39）。「あなたには現在推しはいますか。もし現在いない場合は過去に推しはいましたか。」という質問項目に「今までに推しはいない」と回答した人を除き、有効回答は 208 名を対象とした（男性 42 名、女性 166 名、平均年齢 20.68 歳、SD=1.39）。

2. 調査時期

2021 年 11 月～12 月。

3. 手続き

Google フォームで質問紙を作成し、SNS を通じて配布した。質問紙の回答を依頼する際には、回答が任意であること、得られた回答が調査目的以外に使用されないことがないことを説明し、同意を得られた方に回答を求めた。

4. 質問紙の構成

- ①フェイスシート（性別、年齢）
- ②推しの有無：「現在いる」「過去にいた」「今までに推しはいない」の中から 1 つ選択。
- ③推しの属性：「アイドル」「俳優（女優）」「声優」「歌手」「タレント」「モデル」「スポーツ

選手」「作家、漫画家」「動画投稿者」「VTuber」「アニメ・漫画のキャラクター」「ゲームのキャラクター」「現実に存在し、日常的にコミュニケーションの取れる相手」「その他」の中から、現在最も熱中している、または過去に最も熱中していた推しの属性を1つ選択。これ以降の推しに関する質問では、属性を回答した「最も熱中している(していた)推し」について思い浮かべ、回答を求めた。

- ④推しへの感情に関する質問項目：予備調査から30項目を作成。「1. 全くそう思わない～5. とてもそう思う」の5件法で回答を求めた。
- ⑤日本版 Love-Liking 尺度（藤原・黒川・秋月，1983）：下位尺度「love」「liking」からなる26項目。「1. 全くそう思わない～5. とてもそう思う」の5件法で回答を求めた。
- ⑥推しとの関係性に関する質問項目：予備調査から30項目を作成。「1. 全くそう思わない～5. とてもそう思う」の5件法で回答を求めた。
- ⑦恋愛イメージ尺度（金政，2002）：下位尺度「大切・必要」「刹那的・付加価値」「相互関係」「独占・束縛」「衝動・盲目的」「献身的」「成長」の因子負荷量の大きいそれぞれ2項目、計14項目を使用。「1. 全く当てはまらない～7. 非常によく当てはまる」の7件法で回答を求めた。
- ⑧一般他者成人愛着スタイル尺度（ECR-GO）（中尾・加藤，2004）：下位尺度「見捨てられ不安」「親密性の回避」の因子負荷量の大きいそれぞれ6項目、計12項目を使用。「1. 全く当てはまらない～7. 非常によく当てはまる」の7件法で回答を求めた。
- ⑨対人恐怖心性尺度（堀井・小川，1996；1997）：「尺度Ⅰ <自分や他人が気になる>悩み」「尺度Ⅱ <集団に溶け込めない>悩み」「尺度Ⅲ <社会的場面で当惑する>悩み」「尺度Ⅳ <目が気になる>悩み」の4つの下位尺度から、因子負荷量の大きいそれぞれ2項目、計8項目を使用。「0. 全然あてはまらない～6. 非常にあてはまる」の7件法で回答を求めた。

5. 分析方法

④、⑥についてそれぞれ因子分析を行った。また、感情の因子と日本版 Love-Liking 尺度の下位尺度「love」と「liking」について相関分析を行った。

さらに、恋愛イメージ尺度の下位尺度「大切・必要」「刹那的・付加価値」「相互関係」「独占・束縛」「衝動・盲目的」「献身的」「成長」と、一般他者成人愛着スタイル尺度（ECR-GO）の下位尺度「見捨てられ不安」「親密性の回避」、対人恐怖心性尺度の下位尺度「自分や他人が気になる」「集団に溶け込めない」「社会的場面で当惑する」「目が気になる」を説明変数、因子分析によって抽出された感情の因子と関係性の因子を目的変数とする重回帰分析を行った。また、感情の因子を説明変数、関係性の因子を目的変数とした重回帰分析と、関係性の因子を説明変数、感情の因子を目的変数とした重回帰分析を行った。これら重回帰分析の結果を参考に、対人関係のあり方を測る3つの尺度と、推しへの感情、関係性の関連について、共分散構造分析によってモデルの構造を試みた。

IV. 結果

1. 推しに対する感情についての因子の抽出

因子分析の結果、「恋愛希求」「幸福感」「嗜虐心」「恭敬」の4因子が抽出された。クロンバックの α 係数はそれぞれ、.883、.794、.862、.667であった。

2. 推しとの関係性についての因子の抽出

因子分析の結果、「熱狂的崇拜対象」「わきまえた関係」「別世界の存在」の3因子が抽出された。クロンバックの α 係数はそれぞれ、.890、.875、.763であった。

3. 推しへの感情と日本版 Love-Liking 尺度の相関分析

推しへの感情の4因子と、日本版 Love-Liking 尺度の「love」「liking」との相関分析を行った結果、「love」については「恋愛希求」との間に中程度の正の相関 ($r=.644, p<.01$)、「幸福感」との間に中程度の正の相関 ($r=.518, p<.01$) がみられた。また、「恭敬」との間に弱い正の相関がみられた ($r=.310, p<.01$)。「liking」については、「恭敬」との間に中程度の正の相関がみられた ($r=.592, p<.01$)。また、「恋愛希求」との間に中程度の正の相関 ($r=.400, p<.05$)、「幸福感」との間に中程度の正の相関 ($r=.417, p<.01$) がみられた。

4. 関連モデルの構成

Amos を用いて、対人関係のあり方を測る3つの尺度と推しに対する感情、推しとの関係性について共分散構造分析を通して関連モデルの構成を試みた結果、モデルの適合度指標は、 $X^2(34)=37.817 (p=.299)$ 、 $GFI=.969$ 、 $AGFI=.940$ 、 $CFI=.993$ 、 $NFI=.934$ 、 $RMSEA=.023$ 、 $AIC=101.817$ であった。その結果を図1に示す。

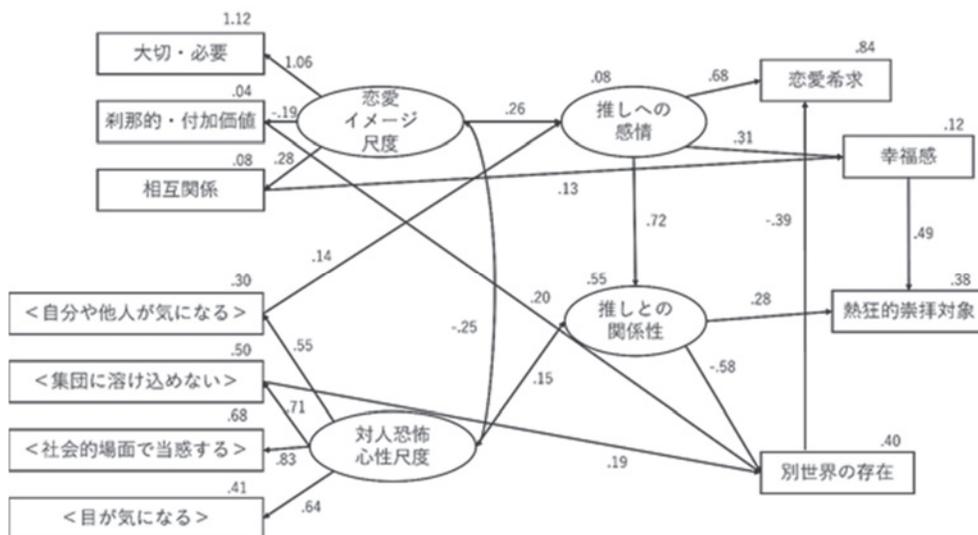


図1 対人関係のあり方と推しへの感情、推しとの関係性の関連モデル

V. 考察

1. 推しへの感情と日本版 Love-Liking 尺度の関連

「恋愛希求」と「love」については、恋愛的感情を表す「love」尺度と恋愛感情が強い「恋愛希求」が中程度の正の相関を示した。このことから、「恋愛希求」に含まれる項目は恋愛的感情であることが示されたといえる。他の因子と比較して「love」との相関係数が一番大きかったことから、「恋愛希求」の下位尺度得点が高かった人は、推しに対して恋愛感情を抱いており、その対象は「恋愛的推し」であるということができると考えられる。

また、人間性に対する好意を表す「liking」尺度は、性格や行動に対する純粋な尊敬を表す「恭敬」と中程度の正の相関を示した。相関係数が他の因子と比較して一番大きかったことから、人間性への好意を一番反映している因子は「恭敬」であるといえる。つまり、「恭敬」は恋愛的感情よりも友愛や親愛が込められた感情であることが推察される。

この結果から、推しに対して恋愛的感情を抱いている場合もあれば、尊敬する対象として捉えている場合もあるなど、幅広い感情があることが裏付けられた。

2. 「恋愛イメージ」が推しへの「感情」と「関係性」に与える影響

共分散構造分析の結果より、「大切・必要」「利他的・付加価値」「相互関係」から構成される『恋愛イメージ』は、「恋愛希求」「幸福感」から構成される『推しへの感情』を促進させることが示唆された。「利他的・付加価値」は『恋愛イメージ』との間に負の関係性がみられていることから、恋愛に対して肯定的に捉え、パートナーとの相互理解を重視している場合、推しへの感情は恋愛感情に近づき、幸福感を抱く可能性があると考えられる。恋愛自体に積極的な姿勢がある場合、「推し」に対しての好意も「人として好き」というものではなく、「恋愛的に好き」になりやすいことが推察される。

さらに、「利他的・付加価値」は、『推しとの関係性』を構成している「別世界の存在」を促進させることも示された。このことから、恋愛を人生における飾りのようなものとして捉えている場合、推しとの関係を構築することを望まないという可能性が考えられる。「利他的・付加価値」は恋愛に対して積極的な姿勢があるとはいえず、恋愛を人生において重要なものとは捉えていないことが予想できる。このため、推しに対する姿勢も自ら距離をとったものとなり、恋愛関係に発展するような状況を回避しているのではないかと考えられる。

3. 「対人恐怖心性」が推しへの「感情」「関係性」に与える影響

共分散構造分析の結果より、「自分や他人が気になる悩み」「集団に溶け込めない悩み」「社会的場面で当惑する悩み」「目が気になる悩み」から構成される『対人恐怖心性尺度』は、「熱狂的崇拜対象」「別世界の存在」から構成される『推しとの関係性』を促進することが示された。また、「別世界の存在」は『推しとの関係性』との間に負の関係性がみられることから、対人関係において悩みを抱えている場合は、推しへの熱中度が高いことが明らかに

なったといえる。現実の対人関係に葛藤を抱えている場合、推し活に熱中することで、その葛藤を緩和させようと試みるのではないかと考えられる。

また、「集団に溶け込めない悩み」は「別世界の存在」を促進させることが示された。このことから、大勢の中で交流をとることに苦手意識がある場合、推しとも交流をとりたいたと思わず、関係性を構築しないことが示唆された。自身の集団の中でのコミュニケーション能力に自信がないと考えている人は、推しとの交流を避けるのではないかと考えられる。

4. 「推しへの感情」と「推しとの関係性」の関連

共分散構造分析の結果より、『推しへの感情』は『推しとの関係性』を促進することが示された。『推しとの関係性』は、「熱狂的崇拜対象」に正の寄与、「別世界の存在」に負の寄与がみられることから、推しに対して熱烈な好意を抱いている場合には、対象と距離を取ろうとは思わず、逆に近づきたいと考えるのではないかと推察される。

また、「別世界の存在」は「恋愛希求」を抑制することが示唆された。推しと自身の関係を構築することを望まない、あるいは忌避している場合は、推しのことを恋愛対象として見る可能性が低いということが考えられる。さらに、「別世界の存在」が『恋愛イメージ』の「刹那的・付加価値」によって促進されることを踏まえると、恋愛に対する熱意がない場合は推しに対しても自ら距離を取り、恋愛に結びつけることを望まないと考えられる。さらに、「別世界の存在」は『対人恐怖心性』の「集団に溶け込めない悩み」によっても促進されることから、自身のコミュニケーション能力に対する評価の低さは、推しとの関係構築、恋愛的感情を抱くことにも否定的になるのではないかと推察される。

VI. 総合考察

1. 本研究の成果と意義

本研究では、推しがいる人の対人関係のあり方が、推しへの感情、推しとの関係性に及ぼす影響について検討してきた。その結果、個人の対人関係のあり方が推しへの感情、推しとの関係性に影響を与えていることを明らかにすることができた。恋愛へのイメージが肯定的かつ重要であると考えている場合は、推しへの感情、特に推しに対する恋愛的好意が促進されることが示された。また、対人関係において悩みがある場合、推しに対して熱狂的な応援をすることも示唆された。一方で、集団におけるコミュニケーション能力に自信がもてない場合は、推しとの関係性を構築することを望まず、恋愛対象として捉えて恋愛感情を抱くことに否定的になることが明らかとなった。

さらに、推しへの感情が恋愛感情に近いほど、推しとの関係性を構築したいと考えていることが示された。推しを「熱狂的崇拜対象」とみなすことの背景には、対人関係への悩みがあることも示唆されている。これらのことから、対人関係への悩みが大きくなることで、推しに対する熱狂度がより高くなり、さらには依存的になるリスクがあると考えられる。これ

は田中 (2009) が指摘している、恋人への過剰な依存による周囲との関係の希薄化と関連があることによっても裏付けられる。対象は現実的に関わることのできる恋人ではなく推しであるとしても、恋愛感情を向けているという点で共通しており、過剰な依存によって起こる問題も同様のものとなると考えられる。今後は、推しとの関係性の捉え方が過度に依存的になる場合については、対人関係における問題との関連に焦点を当ててさらに検討する必要があるといえる。

2. 臨床への示唆

本研究の結果から、推しに対して恋愛感情がある人や熱狂的な応援をしている人は、対人関係の悩みがもっている可能性がある。言い換えると、対人関係での葛藤を推し活によって解消している場合もあるかもしれない。したがって、推しに対して熱中することを通して対人関係の悩みが緩和するということが生じるならば、当事者にとってはポジティブな影響として捉えられる。本来「推し」とは趣味の一つであるといえるが、日常の悩みから一時抜け出すことのできる存在として、あるいは癒やしを与えることができる存在と捉えることができる。このことから、自身の心の安定を図るためにも、推しに対する感情や応援のスタイルを大切にすることは重要であるといえる。

しかし自身の推しに対する感情や、関係性の捉え方について、熱量が大きすぎると感じた場合には、一度自身の対人関係のあり方に向き合うことが必要かもしれない。推しに過度に依存的になると、現実の対人関係が希薄化する可能性があると考えられる。推しに熱中している間は推し活だけで満足感が得られていても、ふと日常の生活に戻ったときに友人との繋がりが薄くなっていると苦悩を感じる可能性が高い。このような場合には、推しを介した友人関係を構築することが有効な解決策となるかもしれない。自身の推し活を楽しみながらも、周囲との関わりも持てるように、バランスを工夫することが大切である。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、推しの対象を「現実存在し日常的にコミュニケーションをする相手」に限定せず、幅広い対象を想定して対人関係との関連を検討してきた。しかし、推しの属性の違いによって、その対象を推している人の感情や関係性の捉え方が異なる可能性がある。したがって、今後は「推し」の属性を限定してさらなる検討が求められる。そこで、推しの属性が異なることによる対人関係への効果の違いも明らかにする必要があるといえる。

また、本研究では推しの対象について「恋愛対象になる性別」にのみ着目したわけではない。たとえば、「恋愛希求」の項目の中には、恋愛ではなく友人を対象とした関係性にも抱く可能性のある感情が含まれている。このため、本研究で提示した恋愛的推しに友愛感情が含まれており、純粋に恋愛感情のみを扱えなかったという限界がある。

最後に、「推し」という概念は比較的新しいものであるため、推しを介した対人関係の間

題についてはさらなる検討の余地がある。本研究で見られた課題を考慮した上で、多くの視点から「推し」についての研究が展開されることで、さらなる知見が累積されるだろう。

<引用文献>

- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, 47, 2, 180-190.
- 榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, 48, 4, 444-453.
- 藤原武弘・黒川正流・秋月左都士 (1983). 日本版 Love-Liking 尺度の検討 広島大学総合科学部紀要Ⅲ, 7, 265-273.
- 堀井俊章・小川捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, 20, 55-65.
- 堀井俊章・小川捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成(続報) 上智大学心理学年報, 21, 43-51.
- 伊福麻希・徳田智代 (2006). 恋愛依存傾向尺度作成の試み—男女間における恋愛依存傾向の比較— 久留米大学心理学研究, 5, 157-162.
- 石本雄真 (2010). 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, 21, 3, 278-286.
- 金政祐司 (2002). 恋愛イメージ尺度の作成とその検証: 親密な異性関係、成人の愛着スタイルとの関連から 対人社会心理学研究, 2, 93-101.
- NHK (2020). 人生が輝くヒケツ! “推しのいる生活” のススメ あさイチ 10月5日放送回 <https://www1.nhk.or.jp/asaichi/archive/201005/1.html>
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 岡田努 (2021). 鉄道オタク青年の対人行動を自己に関する探索的検討 金沢大学人間科学系研究紀要, 13, 27-44.
- 高野紋佳 (2020). 令和2年度特殊実験調査Ⅱ報告書 恋愛関係におけるパラダイムシフト—恋愛対象者が「推し」に布置されることに着目して— (未公開)
- 田中純 (2009). 青年期後期の恋人への依存症に関する研究—恋人との関係評価及び依存対象との関連から— 九州大学心理学研究, 10, 139-147.
- 山田みき・岡本祐子 (2008). 「個」と「関係性」からみた青年期におけるアイデンティティ: 対人関係の特徴の分析 発達心理学研究, 19, 2, 108-120.
- 山口晶子 (2015). 大学生の趣味とキャンパスライフ: オタク趣味に関する女子学生へのインタビュー調査から The Basis: 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要, 5, 119-135.